

北欧における音楽の生涯学習について：デンマーク・Brahmetrolleborgg混声合唱団との演奏会から

著者	岡元 眞理子
雑誌名	北海道浅井学園大学生涯学習システム学部研究紀要
巻	2
ページ	219-234
発行年	2002
URL	http://id.nii.ac.jp/1136/00000663/

北欧における音楽の生涯学習について — デンマーク・Brahetrolleborgg 混声合唱団との演奏会から —

Lifelong Learning in Music in Northern Europe — A Joint Concert with Brahetrolleborgg Kirke, Denmark —

岡 元 眞 理 子

Mariko OKAMOTO

I. はじめに

ここでは、2001年秋に訪れたデンマーク・Faaborg 市の Brahe Trolleborg 混声合唱団とのジョイント・コンサートと交流会、その後の文通などから、団員の生活の様子、日本とデンマークの芸術や金銭の価値観、また、音楽性と生活の中での音楽の浸透度などを探る。また、両国の地域文化活動を実践している、両合唱団の共通点、相違点など文化について考察する。それらを理解することにより、音楽を通しての交流のあり方を考え、音楽の生涯学習について考えてみることにする。社会福祉国デンマークの文化状況と我が国の120年あまりの西洋音楽を考え、また、その取り組みにおいて、活動者や愛好者方より生じた、それら現状を省みるための、デンマークの音楽状況について記述し、予想される状態、期待される生涯学習のあり方などの参考にして行きたい。なお、この研究は当大学北方圏生活福祉研究所研究費の助成を受けた。

II. デンマークの概観

(1) 地形と政治

正式名称 (デンマーク王国)、面積 (43.075平方キロメートル)、人口 (約5,525,000人)、人口密度 (122人)、主要宗教 (ルター派国教会)、政治形態 (立憲君主制)、議会 (1院制を採用、フォケティンといわれ全体で179席) 国際関係 (NATO, EU, 北欧理事会, 国連加入)、地方行政単位 (14の都道府県にあたるアムトと275の市町村にあたるコロネからなっている) [地図 1]

(2) 気候と歴史

ユランド半島とフン島、シラン島など400を超える大小の島からなっている。グリーンランドとフェロー島が地領としてデンマークに帰属している。ほとんどの島が九州より少し大きく、地形はほとんど平坦で最高地点が海拔173メートルしかない。シラン島は比較的肥沃な土地であり、ユラン島から東部と西部は偏西風の影響で砂浜が多く、19世紀以来植林と土壌開発が行われている。気候はメキシコ湾流の影響で高緯度の割りには穏やかで、日照時間は冬短く、夏長い気候である。歴史はデンマーク人が北ゲルマン人の中のデーン人であり、9世紀以降ヴァイ

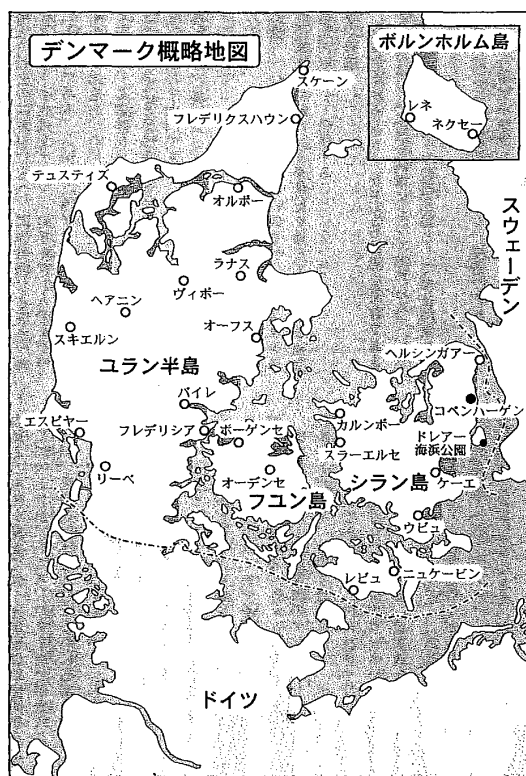
キングの時代に君主制が成立し、その後現在の王室の基礎が築かれた。現王室が築かれた時代には、ドイツ沿岸とスウェーデン南部のスコネ地方を領有していた。一時はイギリスの支配から逃れた強国であり、14世紀には北欧3国をも支配していた。その後、スコネ地方とノルウェーを失いシュレスヴィヒ、ホルシュタインをドイツに分けて譲ったため小国となる。

第2次世界大戦では、ナチスドイツに占領され、レジスタンス活動も盛んであったが、現在は典型的な社会福祉国家となり発展してきたのである。

(3) 文化

デンマークといえば童話作家のアンデルセン、哲学者ではキルケゴール、物理学者ではニルス・ボーアなどが世界的に有名である。デンマークでは有名な教育学者グルンドウなど代表する教育や社会習慣に影響を及ぼした多くの人材がいる。日

本との関わりで注目すべき点は、大正時代を前後して、日本から多くの農業研修生がデンマークに渡り日本の農業開発を行ったことである。愛知県の三河地方は「日本のデンマーク」というまでに「農業の理想郷」のモデルとして発展したのである。



地図1

小池直人著「デンマークを探る」より]

III. Brahetrolleborg 合唱団

(1) Brahetrolleborg 合唱団の所在する Faaborg 市とは

ヒルン島とシェラン島の間に位置するフン島の Faaborg 市 (ファボー) に存在する。ファボー市はどんな町 (写真1) かというと、人口17,780人 面積17,441ha あります。町は海に面しておりテニス、ゴルフ、オリエンテーリング、サーフィン、フィッシング、水泳などの施設とそれらの人々の宿泊施設などが、整っている。Faaborg 市からは現在、鉄道は運行されておらず、Odense 市、Svendborg 市まで30分程車を利用する必要がある。バスの運行は1時間1本、上記市まで運行されており、上記市から、コペンハーゲンまで行くことができる。Faaborg 市の産業は農業と商業である。海に面しているが、現在、漁業は成されていない。商業として観光も盛んである。また、市長は現在女性であるが、現在、前市長は漁業関係の方であった。

[写真1 Faaborg 市の様子]

(2) Faaborg 市の教育関連機関の様子

小・中に相当する9-10年制の Folkeskole が8校存在する。その中で一番大きい Toftegaard 校の図書室で今回の演奏会交流パーティが開かれた。その模様は合唱団の交流のところで述

べることとする。この学校の校長先生が Brahetrolleboerg 混声合唱団の指揮者 Mrs.KirstenJensen さんのご主人の Mr.Ulrik Hedegaard さんである。そのため今回、学校の様子・デンマークの教育の様子などたいへんよく知ることができたのである。

Toftegaardsskole (Toftegaard 校) は10年生まで在籍しているが457人の生徒数であり、Faaborg 市では一番大きい学校である。デンマーク国内でも大きい学校に属する。Gymnasium(高等学校) は市内に1校ある。その他に

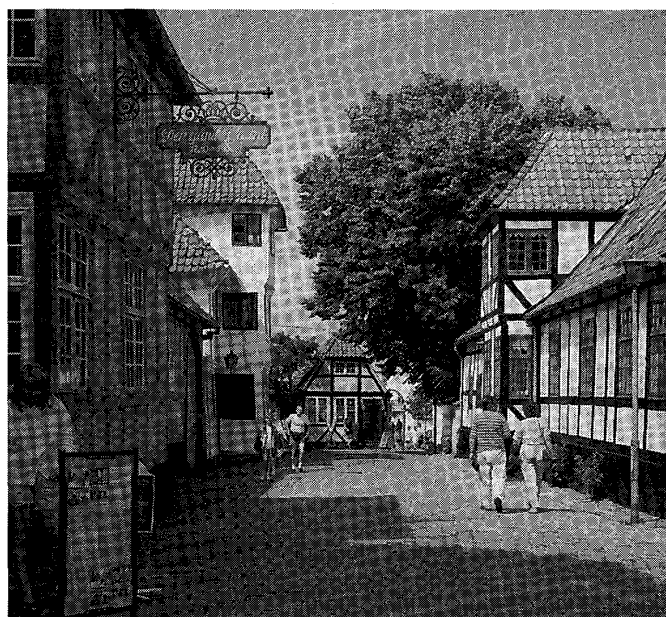


写真1 Faaborg市・旧市街の様子

全寮制の小・中学校で何らかの問題で Folkeskole 在籍中に何らかの事態が生じた場合、受け入れる学校である。主な事情は友情関係、健康状態、家族関係などである。また、デンマークには「塾」は存在せず、言葉すら訳せないということである。Folkeskole 卒業後に入る商業学校がある。これらは当大学生涯学習システム学部創刊号にて発表した、「ドイツ生涯学習」の教育機構と非常に類似する。また、生涯学習機構を取り入れている点で興味深い点は、ポイント制を導入し、実社会に出てポイントを貯めることができる。教育機関に在籍しない空間を埋め、再び大学受験を挑戦することができる。一生の中で学びたいことを学ぶシステムが確立できている。

さて、私立の高校 Freeskole も2校ある。市の人口の割に学校の数が多いといえる。次に保育園について少々記載する。幼稚園ではなく、保育園という形である。日本でいう幼稚園は、「モンテソーリ」「ルドルフシュタイナー」などの特別な教育を目標にしたものが5園ある。あとは乳児園が1園、余暇活動センターが2園、フリータイムクラブが1園、統合幼稚園（小・中学校に併設されている）が4園もある。人口2万人程の町にこれだけの小学校前の児童を預ける機関が存在するのである。図書館も掲げておく。Faaborg 市内に10の図書館がある。貸し出し業務のみの所も含まれる。また、コピーサービスやCDや楽譜の貸し出しもしている。市内に本屋としての商店は存在せず、コーナー程度の店が多くある。図書館の稼働率が良く、たいへん親しまれていると感じた。

(3) 福祉関連機関

市内には、老人ホームが2施設、デイセンターが1施設(通常の健常者用)、デイケアセンターが5施設(5施設中1施設が痴呆老人の施設)存在する。デイセンターとデイケアセンターの違いは、前者は老人の方の趣味などをできる施設、後者はケアを必要とする老人の日中を過ごす施設である。ただし、デイケアセンターの中には、宿泊施設の整ったところや、年齢に関

係なくケアの必要な人が過ごせる設備を持ったところもある。ちなみにデンマークでは「寝たきり老人」はいないようだ。よほどの大病でない限り車椅子や医療器具の付いたイスに座り日常生活を続行できる。上記の施設の他に市内にデイセンターとデイケアセンターが併設された施設が1つあ



写真2 合唱団と指揮者

るようだ。その他老人ではない大人を収容する施設が1つ、ハンデキャップの方のためのデイセンターが1つ、生活施設（宿泊施設）が1つ、精神病者援助センターが1つ、脳損傷者援助センターが1つ、全ハンデキャップ援助センターが1つ存在する。教会は10ヵ所、墓地は2ヵ所、博物館は4ヵ所ある。病院は県立病院が1つ、ホームドクターの数は掴めなかったが多数存在する。運動施設は屋内体育館が4館、屋内プールが1つ、屋外スポーツセンターが1つある。すべて県立、国立、公立である。以上、Faaborg市の概要を記載することにより、市民の生活環境が想像でき、文化面の様子が理解することができる。

(4) Brahetrolleborg 合唱団

市には2つ合唱団がある。その一つが、Brahetrolleborg 混声合唱団(写真2)である。市内にある Trolleberg という地域の名前で、通りや教会に付いている。この名前の小学校の生徒と教職員の人たちが、一緒に歌う合唱団としてスタートしたため、この名前が付いた。現在は一般の人たちも歌えるサークルとなっている。創設当初から30年程生徒と歌って楽しんでいたとは、管理教育ばかりの日本では考え、想像するのに難しい。デンマーク国民の精神性から認識しなくてはならない。さて、ここでは先に進むことにする。団員の男女比率は、男性9人、女性19人である。創立40周年を迎える合唱団である。ちょうど2001年11月14日に40周年記念演奏会を開催したばかりの合唱団である。その演奏会にお花とメッセージを送ったところ、当日、市長がいらっしゃって「日本との交流を喜ばしいことであり、今後も続けることを望んでいる」と、挨拶の中で申されたそうである。

練習場所は Faaborg 教会で行われている。毎週水曜日19時30分から練習している。遅い時間帯であるが、仕事が終わって、夕食を取ってから無理のない時間から練習を始める。日本において、夜の練習の多くが、6時半か7時からであるが、主婦は非常に慌てて外出しなくてはならない。日本の団員の多くは、専業主婦の人が多く、一日のスケジュールを合唱のために合わせる事ができる。デンマークでは「主婦」という言葉が死語となっているということで、ほとんどの女性は仕事を持っているのである。国民の就労者の6割が女性で4割が男性という

ことである。Faaborg 市の市長さんも女性であった。

雇用状況において、女性が働くことにより、それまで女性が行っていた「子供の世話」「掃除」「洗濯」「料理」などの利用が増え、雇用状況を活発にした事実も、重要な男女参画の相乗効果として成功させてきたといえる。会の会費は200D.kr, 日本円で約3,000円となる。これは日本の合唱団の平均値と一致するといえる。もっとも、さらに高いサークル会費となっているところも少なくない。東京の合唱団の平均会費は5,000円となっている。(2000年調べ)

次に、教会の様子 [写真3] だが、1478年ローマ法王から教会建立許可がでた、デンマークにある3つの聖霊教会の一つが『Faaborg 聖霊教会』である。この教会の始まりは1200年代までさかのぼる。その後現在まで教会を守ってきたのである。1511年に描かれた壁画はデンマーク国立博物館に置かれている。Faaborg 聖霊教会の現存するオリジナルは聖歌隊の椅子の部分の模様である。1500年代の物である。洗礼台は1200年代のものは博物館に収納されている。現在のもものは1837年のものである。オルガンは1979年に34声の新しいオルガンとなった。また、町の中央広場に1200年代のニコライ教会の「鐘楼」が今もあるが、現在はここの Faaborg 聖霊教会の小さな鐘が1日4回優しいメロディーが町中に鳴らされる。朝の8時「港のひざを朝日が照らす」12時「主よ、歌う心を与えよ」午後4時「あなたの道をたどれ」夜10時「平和がこの国とこの町を覆う」である。日常の生活に音楽がなくてはならないものだとよくわかる。また34声のパイプオルガンの音色は崇高で神々しく重厚に鳴り響くものである。このオルガンを弾く専属オルガニストは、Mr.Tore Bjoern Larsen 氏である。氏は1957年生まれの F y n 音楽院(国立)の教授でもあり、作曲家でもある。私たちとの合同演奏会では Brahetrolleborg 合唱団の伴奏はすべて彼のオルガンであった。ヨーロッパでは、大変有名人なので、プロフィールを載せ、デンマークの音楽家がどのように勉強しているのか、参考としてみることにする。本職は Faaborg 教会のみのオルガニストではなく、Faaborg 教会の隣の Helligaandskirken 教会と2つの専属オルガニストである。この仕事を持つまでの経歴を記載する。オーデンセの F y n 音楽院のオルガニスト科卒業、オーデンセの大聖堂のオルガニスト、Mr.Bo Groenbech 氏、ヘルシンキの大聖堂のオルガニスト、Mr.Bo Groenbech 氏に師事、その後、コペンハーゲンの王立コペンハーゲン音楽院で学び、1987年オルガン演奏学と教会音楽学専攻し、修士課程を取得修了、卒業資格を得るが、その後1998年に再び作曲学科で修士課程を修了し、現在に至る。このように学びたい学科をいくつでも学んだのである。また、1985年 Ollerup 教会を基点に「南 F y n オルガンフェスティバル」を主催している。1993年より、「デンマーク作曲家協会」の会員である。そして、1993年にはデンマークの作曲家 Grethe Krogh の作品をパリのノートルダム大聖堂の聖堂改築式典において初演をした。このようにデンマークにおいてもヨーロッパにおいても有名なオルガニストであるといえる。2001年9月6日の合同演奏会では、11月に予定されていた Brahetrolleborg 合唱団40周年記念のお祝いに作曲した＜新約聖書「ヤコブの手紙」より「ある兄弟からの手紙」＞と題した合唱と＜オルガンのための3つのモテット＞の初演した。これらのことから、オーデンセ音楽院の次に王位コペンハーゲン音楽院、それも3つの Diploma を取

得する。生活を維持しながらも学べる社会保障と環境であることが伺えた。

この合唱団の創始者は Mr.Vigo MoellenJensen 氏である。現在は氏の娘の Mrs Jensen が指揮をとっている。彼女はオーデンセの国立教員養成大学を卒業している。北欧を含めてヨーロッパがそうであるように、教員と演奏者は学習内容が大きく異なる。また、地域の市民活動の指導者は様々な社会人に接すること、また、少年少女の心理なども十分学び、社会に出てゆくので、柔軟かつ温厚な性格であることが望まれる。そのように教育を受けることができるのが教員養成大学である。Folkeskole の放課後の課外授業、社会学校などの指導者もこの養成大学を卒業している。児童心理学、老人心理学なども学習し、実践に活かされてゆくのである。

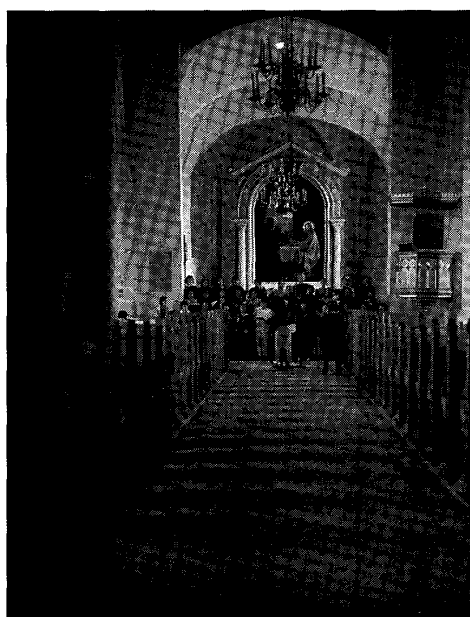


写真3 リハーサル風景

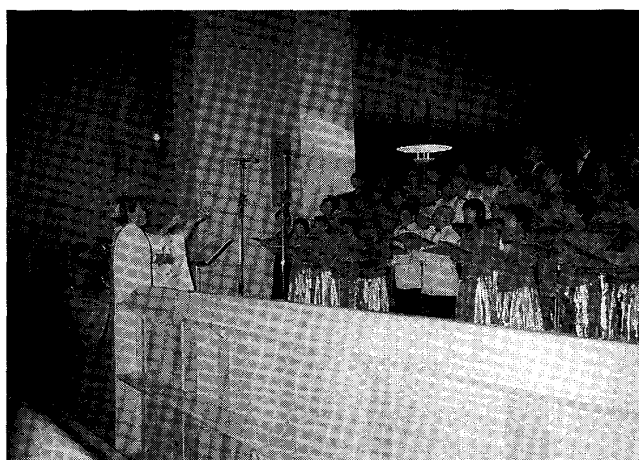


写真4 本番の風景

IV. 演奏会の様子

(1) 演奏会の実行日と場所

2001年9月6日、18時から行われた。この日の演奏会(写真4)はもう少し早めに始めたかったが、仕事が終わって駆けつけてもこの時間がギリギリとのことであった。仕事をしている場所が、Faaborg 市外の人が多い。また、演奏会后、交歓会が予定されているのでその場所の移動と談笑の時間も考えてのことであるようだ。演奏会の場所は、先に記載済みの Brahe Trelleborg Koret (ブレーヘ・ツレレボルグ教会)である。550人収容の大きく古い教会である。教会には多く見られる「塔」がないため音響がとても良く、国内外のCDの録音に度々使われる有名な教会である。由緒ある教会でもある。教会に設置されたパイプオルガンは教会で専属のオルガニストを置いて居るほど良い音色の代物であった。そのオルガニストと最後の合同曲「Ave verum corpus」を演奏できたことはたいへん珍しい経験であった。普通は管弦楽かピ

アノが日本では通常である。日本からの団員にとり、一生に一回の経験となったといえる。

(2) 日本の合唱団

日本からの合唱団名は「ゲーテ野ばら合唱団」という。1996年から結成されている合唱団である。延べ人数は150人在籍している。その中のヨーロッパ演奏旅行に行くことができる団員で、無理せず演奏会を現地で持つこととなっている。今回は42名の参加があった。「ゲーテ野ばら合唱団」は、ゲーテの詩である「野ばら」が世界中の作曲家により作曲されている。どれも歌いやすい童謡、民謡、歌曲、合唱曲などとなって世界中で愛唱されていること、日本において1881年の「文部省音楽取調掛」編集の初編教科書に導入されて、実に121年間日本人が歌う機会の提供を受けたことになる。(提供を受けた事により国民への浸透度が増したといえる)野ばらに関しては、またの機会に発表したいと考えている。この合唱団の練習は札幌教育文化会館の練習室で行われた。他の会場となることもある。会費は一回1,000円である。それら会費は指導者の練習時の交通費(指揮者の筆者、ピアノ伴奏者)と楽譜印刷、新聞印刷、連絡費、飴や飲みもの代などである。余りは旅行の積み立て金に加える。旅費は道の北方圏文化交流基金から20万程度頂いた。この基金は残念ながら今年で閉じられた。

V. 合同演奏会

(1) 演奏会の企画他

今回は「のばら合唱団」42名が演奏旅行に出かけた。この演奏旅行は、筆者が行き先、旅行社、曲目、相手のデンマークの合唱団、同伴伴奏者など筆者が長い時間をかけて決定してゆくのである。ゲーテ野ばら演奏旅行としては、1996年以来、今回で4回目となる。尚、筆者は、1995年には、少年少女75名のオーストラリア演奏旅行、シドニー・オペラハウスでの演奏会を経験している。1995年と1998年以外は民間交流で筆者の計画企画の上にある。他は州招聘、と国の招聘を受けての演奏旅行である。招聘をいただいた時は演奏会場・宿泊の便宜・飛行機の待遇などたいへん良く、それらの国の文化に対する配慮が、どんな小さな外国の団体へもゆき渡っていることが伺える。さて、どのように旅行まで漕ぎつけるかをここに載せる。

第一段階では「どこの野ばらを歌うか」そこで目的地が決まる。

第二段階「公募の状況で何人行けるか」これによってその国のどの曲を、合唱団に歌うかが決まる。3部同声合唱か、3部混声、4部合唱、斉唱、2部重唱など考えて選択するのである。

第三段階「どの合唱団と合同合唱が可能か」これによって合同曲を何にするか決まる。

第四段階「これらのことを満足させてくれる旅行会社を選ぶ」これによって、ある程度の金額の数字が旅行会社から提案される。

第五段階「練習の充実、旅行の説明を筆者が行う」

これらのことをすべて2年間で着実に行う必要がある。これらのことを円滑に滞りなく行うために、5人のスタッフを配置している。会計、楽譜係、会場係、団員連絡係、そして筆者の

補佐をして海外への連絡を補佐し、本番と旅行中は筆者のスケジュールも手配し、知事や市長との茶会や打ち合わせなど時間を予想し的確に動く配慮が必要である。筆者が指導に専念できるようにいろいろな方が支えの上で、始めて成功を導けるのである。

(3) 演奏曲

今回のプログラムは次の通り(図1.)である。今回は北欧の作曲家が、あまり日本では知られていないので、下調べに時間がかかった。作曲者のほとんどは、詳しくしらべられなかった。日本語掲載書籍が見つからなかったのである。

Faaborg Kirke
Torsdag den 6. september 2001 kl. 20.00

Korkoncert

NOBARA GASSYUODAN
Japan

Professor Mariko Okamoto, dirigent
Hiromi Kakuta & Tomoko Takeda, piano

ovriga medvirkande

BRAHETRELLEBORCKORET
Kirsten Møller Jensen, dirigent
Tore Bjørn Larsen, orgel

Rose paa Heden

J.G. Ellsmann (S.2)	Nohara Gassyoudan
H.L. Egmont/Dorn (S.10)	Nohara Gassyoudan
David Herman Engel (S.11)	Nohara Gassyoudan
Salmon Jadasson (S.32)	Nohara Gassyoudan
Daniel Fister Busch (S.2)	Nohara Gassyoudan
Niels W. Gade (S.15)	Solo af Miwa Ishida og Atsushi Okamoto
Peter Grauland (S.19)	Solo af Atsushi Okamoto
J.P.E. Hartman (S.24)	Solo af Mariko Okamoto
C.A.W. Hennenberg (S.26)	Solo af Miwa Ishida

Pianisten Hiromi Kakuta præsenterer klaver værker

JAPANSKE SANGE
Af Mariko OKAMOTO

1. Sakura (Kircheher Blomster)
Japanske Traditionel sang
2. Machiboke (Jeg har været forlovet)
Tekst: Hakusya Kitahara Musik: Kosaku Yamada
3. Koyu-no-tsuki (Månen skinner på slottet ruinerne)
Tekst: Banami Tsuchi Musik: Rentaro Taki

Fremføre Japanske og Italienske sange
Miwa ISHIDA
Atsushi OKAMOTO
Piano: Tomoko TAKEDA

JAPANSKE KORVÆRKER
af
NOBARA GASSYUODAN

1. Hishone (Hakiri) (Over Hishone Hjerter)
Japanske Traditionel sang
2. Akatombo (Red Drage Fly)
Tekst: Riko Miki
Musik: Kosaku Yamada
3. Karamatsu Larch Tree)
Tekst: Akira Negishi
Musik: Hideo Kobayashi

SYNGE SAMMEN
BRAHETRELLEBORCKORET
af
NOBARA GASSYUODAN

AVE VERUM CORPS
W.A. MOZART
AVE VERUM CORPS
natura et morte vivens
veritatem, immortalem
in cruce pro homine
Cuius laus
perfectionem
non da fluxit et sanguine
est nobis praesentis tum in
morte eximio
immortis eximio

図1 デンマークBrahe Trelleborg合唱団と日本野バラ合唱団のプログラム

(4) 演奏曲の内容

Brahetrelleborg 合唱団演奏曲

第1曲目：Johann G Whaiter (1684~1748) 作曲，曲名「Min sjæl, du Herren love」(我を許しとう) オルガン演奏者<Mr..Tore Bjoern Larsen>，荘厳な4分の4，会場のせいなのか，音が光のように広がり，魔法にかかったのかと思う程教会曲らしい風格のあるものであった。

第2曲目：N.W.Gade (1817~1890) 作曲，曲名「Morgensang af Elverskud」音楽劇から「朝の歌」合唱曲，今回のこの旅はガーデを訪ねる旅でもある。ガーデ作曲のゲーテの詩の「野ばら」を歌いに来たわけである。そのガーデの音楽劇を聞くことができたことはBrahetrelleborgの配慮を感じた。「野ばら」は旋律的で美しい歌であり，この「朝の歌」もたいへん美しく，今回ガーデを少し理解できたといいたい。声部は混声4部，オルガン伴奏である。またオルガン奏者Mr.ToreBjoernLarsen氏はガーデが設立したデンマーク王立音楽院(1867年)で，1987年に卒業し，その後も12・3年間ここで学んでいる。ガーデの演奏法やデンマーク王立音楽院の伝統を披露してくれた。

第3曲目：P.E.Lange-Moeller(1850~1926)作曲，曲名「Fra「Tre salmer op.21」im te,Domine, speramus」(作品21の3)ドミネ スペラムスと始まるこの曲はメロディチックで聴いたことがあるような懐かしい曲であった。(作曲者について日本語版英語版大グローヴ事典に掲載なし)

第4曲目：Knut Nystedt (1985～) 作曲，曲名「I will praise thee, O Lord」(私は褒め称えます) 静かではあるが，胸に迫る混声4部合唱曲，楽譜を見てないが，現代的で非常に難しい曲である。男声が迫力があり，よく鍛えられている声である。さて，作曲家はオスロ音楽院オルガンと作曲を学んだ。オスロのトルスボウ教会のオルガニストを務め1950年からノルウェー合唱団の指揮者，1960年オスロ大学で合唱団指揮を教え，スカンディナヴィア音楽の第一研究者としてアメリカで何度も講演している。現在86歳であるが，元気に暮らしているということである。12音技法を用いたり，大胆な調性とリズムを用いている。

第5曲目：Sv.S.Schultz (1913～1999) 作曲，曲名「Aftenboen」(夕べの祈り) 静粛な旋律の曲，美しく静かに歌いはじめられる。溶け合う4声部，指揮者の巧みな指揮法，合唱の指揮が管弦楽や吹奏楽と異なる点がよく判る。現代曲の和音特有の新鮮さを感じた。

第6曲目：Niels la Cour (1944) 作曲，曲名「Fred hviler over land og by」(やすらぎが地と民に) 穏やかな曲想でこのような曲想が信仰で生まれると核心に迫れる旋律である。

第7曲目：Oskar Lindberg (1887～1955) 作曲，曲名「Gammal foebodpsalm fraan Aalvdalen」(エルグダーレン地方の羊飼いたちの古い賛美歌) オルガン曲，演奏会の休憩に演奏した曲。リンドベリは14才からガグネグでオルガニストを務める。ストックホルム音楽院で学び1906年教会音楽家の資格を得る。ストックホルム三位一体教会オルガニストを14年，その後終生エンゲルブレクト教会オルガニストを務める。その間，ストックホルム高等音楽学校で和声を教え，ストックホルム音楽院の教授でもあった。ダーラナ地方の農家の出身で農民ヴァイオリン弾きの家系に育つ，そのことが大きく作品に表れ，スウェーデン青年グループで(ラングレストレムやアッテベリなどいた) 民族音楽とラフマニコフやシベリウスからの影響も受け均等的作品を残している。1939年版讃美歌集の編纂に多大な功績を残し，彼の作品も14曲入っている。

日本の合唱団「ゲーテ野ばら合唱団」 [以下Sは坂西八郎収集書掲載番号]

第1曲目：J.G.Bellemann (1832～1903) 《ゲーテ野ばら，S.2》

作曲家：1866年ベルリン大学の音楽家教授，翌年ベルリン大学合唱団を指導，王室芸術アカデミー会員，音楽学の分野で多大な功績を残している。無伴奏合唱曲を多数作曲，ピアノ伴奏付き歌曲，管弦楽器伴奏付き合唱曲などがある。

曲解説：ベルリンにて発見：8分の6拍子，F dur，旋律的 wernar と同じロマンチックな曲想である。歌い易い楽しげな wernar より落ち着いた曲といえる。野ばら合唱団では，ステージに乗ってすぐの曲であり，無伴奏のため，最初の音とテンポを取るために緊張したのであった。しかし練習の甲斐があつて無事歌えたのである。

第2曲目：H.L.Egmont Dorn (1804～1892) 《ゲーテ野ばら，S.10》

作曲家：最初法律を学んだ。1828年からフランクフルト・アム・マインで音楽教師となり，その後1832年ハンブルグでは，音楽教師，教会音楽監督となり，1843年ケルンでは劇場のカペルマイスターとして迎えられ，その後現在のケルン音楽院を創設する。1844年～1847年までニーダライン音楽祭主催者・監督を務める。また，「Neue Berliner Musikzeitung」(新ベルリン音

楽新聞) の記者も務める。

曲解説：ライプツィヒにて発見：4分の4拍子，Adur，Schubert の曲と類似しているが，地味にまとめられている。1番と2番が同じ旋律で3番は moll (短調) でまとめられている。野ばら合唱団では1小説目のP (ピアノ) での出だしが呼吸が合わず苦勞した。しかし4声混声としての厚みを出すことができたのである。

第3曲目：David Herman Engel (1816～1877) 《ゲーテ野ばら，S.11》

作曲家：1835年～1837年までF. シュナイダー音楽学校に通い，その後1840年まで音楽の指導を受ける。1841年ベルリンで音楽教師となり，1848年から亡くなるまでメルゼブルグ大聖堂オルガニストを務める。また，この大聖堂付属高校の音楽教師を務める。王室音楽監督でもあった。

曲解説：ライプツィヒにて発見：4分の4拍子，Ddur，Schubert n，Dorn の曲とは異なり流れる優雅な旋律である。歌い易く童謡のような愛嬌がある曲である。曲中にPP (ピアノシモ) が2回出現し，その度に合唱団員は呼吸を整えなくてはならない。

第4曲目：Salmon Jadasshon (1831～1902) 《ゲーテ野ばら，S.32》

作曲家：1849年まだライプツィヒ音楽院に通い，1851年にはかの有名なリストに師事，そしてヨーロッパでは有名なM. Hauptmann (この人もゲーテの詩に作曲をしている。S. 25) に師事した。1856年からライプツィヒ・シナゴーク聖歌隊の指揮者，1866年合唱連盟の指揮者となる。1867～1869年オイテルベ・コンサートの指揮者，1871年からライプツィヒ音楽院の指導，また，1887年には哲学博士号を取得し，1893年から教授資格を得る。音楽理論の世界では世界的に有名で，現在使用している世界中の音楽理論教科書の元になるものを残した。

曲解説：ライプツィヒにて発見：4分の4拍子，Gdur 女声2部合唱，または同声2部合唱，または2部重唱という形である。この曲は野ばら合唱団の人気の高い曲で，これまで3回の遠征の内，2回歌っているものである。非常に歌い易く覚え易くかわいらしい曲である。メZZ・スタッカートが現代風な感覚を引き出している。

第5曲目：Daniel Fisterbusch Reinhold (1825～1902) 《ゲーテ野ばら，S.12》

作曲者：1840～1845年までフライベルク神学校で学ぶ。1857年終身カントルの資格を得る。音楽教師，オルガニストとなる。また，当時では珍しい教会外での合唱団指導も社会奉仕として注目された。また，有名な歌手ゲッツェの最高の弟子であり，歌手でもあった。その他詩人，批評家，政治家として活躍した。作曲作品は声楽曲が多い。

曲解説：ライプツィヒにて発見：Gdur，S.12合唱曲でありS.13は独唱曲となっており，2曲坂西八郎収集に掲載されている。2分の2拍子，弾んだ速めの曲であり，合唱団は歌うのに苦勞した。どうしても発声において腹直筋を鍛えなくては「Sah ein Knab ein Roslein stehn」を歌えないのである。ここの16分音符は弾まなくなるのである。技術的には洋楽特有の発声が理解できなくては歌えないのであるが，軽く楽しい舞踊曲のような味わいがある曲である。合唱団ではミュート気味ではあったがなんとか歌えた。

第6曲目：Niels.W.Gade (1817~1890) 《ゲーテ野ばら, S.15》

作曲家：デンマークの共演の Brahetrolleborg 合唱団が2曲目に演奏した『朝の歌』の作曲家と同じ作曲家であり、今回一番の目的にもなる作曲家である。まず、ここでの Faaborg 教会のオルガニストの Mr.Tore Bjoern Larsen 氏の学んだ王立コペンハーゲン音楽院の創設者である。メンデルスゾーンの弟子であり、シューマンの親友であり、いまや北欧を代表するグリークやニールセンを世に送り出した北欧音楽はもちろんのこと、ヨーロッパでも高い評価を得ている北欧音楽の父である。多くの作品がある。

曲解説：ライプツィヒにて発見：ソプラノ2重唱曲、今回はソリストの招聘関係でソプラノとバリトンで演奏した。4分の2拍子, Gdur, 軽く遊び歌のような感覚を呼び起こす作品。

第7曲目：Peter Grenland (1761~1825) 《ゲーテ野ばら, S.19》

作曲家：法律家であり、キール大学で法律を学んだ。その学生時代より音楽雑誌の編集記者として活躍。1787年コペンハーゲンのドイツ法律事務所の書記となる。1794年コペンハーゲン王室陶器製作所の経理長, 1795年新設の管財庁文書顧問官及び共同管理官, 1801年法律顧問補佐, これらの仕事の傍ら音楽作曲活動を行なったのである。宗教曲を作曲するのが建前のようにこの時代, おおかったのであるが, 宗教曲は存在せず, 歌曲, ソネット, バラード, ロマンズなど匿名で発表しているのである。

曲解説：ライプツィヒにて発見：4分の2拍子, E moll, あどけないかわい曲で, 鼻歌のような軽やかな子供の歌のような感じを持つ。筆者は9月6日, 王室コペンハーゲン陶器製作所を尋ね工場長の許可を得てこの曲を聴いてもらったのである。(写真5)

第8曲目：J.P.E.Hartman (1805~1900) 《ゲーテ野ばら, S.24》

作曲家：コペンハーゲンの兵士教会オルガニストの息子, 1827年法律学の試験を受け, 公務に就く。そのかたわら父親の兵士教会オルガニストの補佐も務める。S. 77Weyse の弟子である。Gade の奥さんが Weyse の娘である。また, Gade も Hartman と同じく弟子であった。プログラム6番と8番は兄弟弟子同士の作品といえる。また, 筆者が2000年に訪れた Kassel のシュポーア音楽資料館のシュポーアと友好関係にあったとは時代錯誤を起こす喜びである。Hartman は1867年, コペンハーゲン音楽院の院長となった。

曲解説：ライプツィヒにて発見：8分の6拍子, Asdur, 伴奏がとてもかわいい曲想となっている。ラン・ラン・ラーンと口ずさみたくなる愛らしい曲である。

第9曲目：C.A.W.Henneberg (1853~1925) 《ゲーテ野ばら, S.26》

作曲家：ベルリンに生まれ, スウェーデンのピアニストである。その間ロンドン伴奏者とイタリアオペラ劇場の伴奏ピアニストとして活躍, 1873年ベルゲン, 1878年ストックホルム宮廷劇場のオペラ指揮者に就任。1912年~1920年マルメ市管弦楽団の指揮者, 1916年南スウェーデン・フィルハーモニー協会理事となる。ワーグナーの作品をスウェーデンに紹介した。

曲解説：ストックホルムにて発見：4分の3拍子, Fdur, 伴奏が野ばら作品では珍しいハーブのようにカデンツェで作曲されている。最後の部分はドラマツィーコとなっている。歌曲らし



い歌曲である。楽譜はソプラノ用ではあるが、テナーでも歌えるように、作られている。

第10曲目：日本古謡・山田耕筰編作曲《さくら さくら》

写真5 プログラム第7曲目の作曲者が勤めていた王立コペンハーゲン陶器製作所の玄関にて第7曲目を歌唱中の筆者



写真6 両合唱団交流風景

作曲家：（1886～1965）詩は日本の古い詩からの引用である。日本の生んだ最高の作曲家である。唱歌から歌曲、童謡、オペラ、管弦楽などある。明治41年東京音楽学校の本科声楽部卒業。すぐドイツに留学、カール・ヴォルフなどに作曲を学んだ。大正3年日本初のオーケストラ、東京フィルハーモニーを設立、帝国劇場などで自作曲を発表、時期に楽団は解散。その後オペラ運動を起こし、石井漠らと舞踊劇などを作曲、同12年には北原白秋と「詩と音楽」を創刊し、歌曲の創作を次から次と発表し、日本語に合う歌曲を創作してゆく。「昭和賛歌」「夜明け」などのオペラを発表、演奏家協会設立、会長を努めた。

曲解説：江戸時代は「さくら さくら 花見て戻る 吉野はさくら 滝田はもみじ 唐崎の松ときわ ときわ 深緑」という内容であった。もともと箏曲でその編集の金田一晴彦がすっかりとした今の詩に改めたのである。昭和16年の文部省の「うたのほん」では、「さくら さくら 野山も里も 見わたす限り かすみか雲か 朝日ににおう さくら さくら 花ざかり」

と改めて転載された。現在、各検定教科書に必ず採録するべき歌として指定されている。

第11曲目：北原白秋作詞・山田耕筰作曲《待ちぼうけ》

作曲家：上に同じ

作詩家：(1885～1942) 福岡柳川出身，早稲田大学中退，歌曲・童謡を通じ，小松耕輔，山田耕筰，中山晋平，弘田竜太郎，成田為三，草川信，藤井清水らが，こぞって北原の詩に曲をつけた。

曲解説：詩は日本の隣国，中国の古い寓話をモチーフとしている。その話をきいた山田は前奏に大連（中国の北部の町）で聞いたチャルメラの旋律を模倣している。軽快なのどかな田舎の様子が伺える歌である。

第12曲目：土井晩翠作詞・滝廉太郎作曲《荒城の月》

作曲家：(1879～1903) 1901年ドイツ・ライプツィヒ王立音楽院留学，その次の年1902年10月病気のため故郷大分に帰国，1903年6月病死。歌曲，ピアノ曲など多くの作品が残した。

作詞家：(1885～1942) 柳川（福岡）出身，早稲田大学中退，「赤い鳥」「トンボのメガネ」などの童謡集，民謡集など山田耕筰，中山晋平，小松耕輔などが詩に作曲している。

曲解説：世界的に有名な曲である。ドイツのホテルなどで歌うとお客さんが口ずさんで一緒に歌いだしてくる曲である。歌詞もよく覚えている人が多く緊張する曲である。この曲に山田耕筰，本居長世がたいへん好み，大正の2代作曲家がそれぞれ変奏曲を残している。もともとは2拍子で花の宴のエは嬰トである。h-moll 2部形式である。「荒廃した城はいったいどこであうか」と話題に上るが，晩翠自身，仙台に行けば青葉城と言い，合津に行けば鶴ヶ城と言い，大分に行けば竹田の岡城と言うので，現在はこの3カ所に記念碑が建っている。格調の高い日本人の生理的短調を満足させる曲想である。

第13曲目：鳥居マコト作詞・滝廉太郎作曲《箱根八里》

作曲家：上に同じ

作詞家：(1854～1917) 明治3年大学南校に学び，外国語学校に入った。さらに，明治13年に音楽取調所を設立するにあたり，研究所と教科書準備所を置いた。その研究生となり，卒業後，その職員となり，アメリカ人メーソンについて音楽を学ぶ。明治19年第一高等中学校の講師，24年音楽学校教授（現在の芸大）対象初年まで，同係，文部省及び音楽学校で出版された教科書は鳥居の手で作られたのである。軍歌の詩を多く残している。中でもこの曲の詩がもっとも有名である。

曲解説：この曲は「中学唱歌」の編集を行った時，応募してきた作品，鳥居が音楽学校の教授であった時，卒業したばかりの滝が応募したのである。この曲の魅力は1泊に言葉を音を2つはめたところである。この歌は演歌として「なんだカンダの神田橋，朝の5時ごろ眺めれば」などと続くのもある。当合唱団は発声練習のごとく歌いきっていた。

第14曲目：三木露風作詞・山田耕筰作曲《赤とんぼ》

作曲家：上に同じ

作詞家：まず、「赤とんぼ」は山田耕筰と斎藤佳三と2つが存在する。この2人は親友同士で、ドイツ留学していた山田のところに斎藤から小包が届いた。その中に三木の詩集が入っていたのである。早稲田と慶応を両方卒業している。北海道函館トラピスト修道院の講師をしたこともある。童謡の「赤い鳥」に多くの詩を載せた。

曲解説：大正10年に出版の「童謡100曲集」に収められている。余談ではあるが、西洋には童謡という歌のジャンルは存在しない。「子供の歌」でまとめられている。さて、この歌は牧歌的な中に哀愁を感じるメロディーである。頭の歌いだしの部分で11度音程も移動する難曲である。舌骨を開き軟口蓋を持ち上げなくてはならない。また、日本語のアクセントが会話において「赤」では「ア」から「カ」は同音か1音しか下がらないが、ここの1番の3小節目では6度も下がる。中声区から低声区に移るので、音質が変わりやすいので気をつけるところが難曲といわれる理由である。野ばら合唱団では、練習を重ね、魅力的な pp で表情まで付けることができたのである。

第15曲目：野上彰作詞・小林秀雄作曲《落葉松》現代日本の合唱曲らしい作曲法で表現されている。秋の風景がデンマークの Faaborg 市の町並みに融和し、忘れられない一曲となった。作曲者・曲解説はここでは省くことにする。

最終曲合同曲：Krahetrelleborg 合唱団と野ばら合唱団、合同演奏 W.A.Mozart 作曲、曲名「Ave Verum Corps」(K618) 教会中に鳴り響くオルガンの音色は、生命の奇跡を十分感じさせてくれた。「幸あれ、まことの御体よ～」と始まる。キリストの整体賛美するローマ・カトリックの聖歌同教会の整体賛美式、ミサの整体奉挙、整体拝領などの後に歌われる。13世紀に成立した。作者は教皇インノチェンツィウス4世といわれている。その後ジョスカン・デフレ、ラッスス、パレストリーナなどが作曲している。中でもモーツァルトのこの曲は大傑作である。どちらの合唱団も誇り高く神からの声を発したのである。

以上が今回の演奏曲である。野ばら合唱団より Brahetrelleborg 合唱団の方が迫力があり、それでいて繊細な演奏であり、これがデンマークの歌声かと感動したのである。また、野ばら合唱団は難曲の「野ばら」があり、思いっきり歌えなかったのではないかと推察できる。3拍子の野ばらは歌詞との関係、加えて国民性のリズムの持ち方など考えられる。特に野ばらは歌詞が同じであるため、旋律を覚えづらいことがいえる。歌とは詩とメロディーが一体になっているので、歌詞のニュアンスで覚えるともいえるのである。そこで、作曲者の生い立ちや育った環境などを指導の中に導入することが重要であると今回感じた。作曲者を訪ねる旅であるので、前もって学習する方がリアルに旅行を夢見られていいかもしれない。このようなことを反省として掲げたい。

(5) 演奏会後の交流会

演奏会が終了し、荷物を持ってバスに乗り込み、Faaborg 市で一番大きい小中学校の校長先生が Brahetrolleberg 合唱団指揮者のご主人の学校で行われました(写真6)。玄関から地下に下りてゆくと図書室が広がり、その中心の空間の部屋でパーティが開かれた。着くともうすで

に、手作り風なお料理が並んでいた。ローストビーフ、カボチャのグラタン、ミートローフ、パンのサンド、サラダ料理、ジャガイモ料理、ケーキ類などである。職業を持っている方たちが、演奏会もりっぱに成功させ、さらにパーティでは会話に花を持たせるべく笑顔の連発であり、料理まで作り、ほんとうにエネルギッシュな方たちであった。何度もいろいろなテーブルで乾杯の連続で、盛り上がっていた。デンマーク語は難しくて英語での会話となった。筆者のテーブルでは日本語も連発、2・3の単語を覚えていた。短い時間ではあるが、音楽を通じての仲間であり、打ち解けるのに時間はかからなかった。心から交流を行えたのである。そして、1時まで盛り上がってしまった。筆者のテーブルのご夫婦の方はこれから橋を2つ越えて帰り、明日は6時に家を出るそうである。2人とも一緒に出勤するそうである。今日は遠いところからの友達だからと言って笑顔をいっぱい、日本のことを質問していた。日本の合唱団はお土産を持っていったので、それらをプレゼントし、お礼にデンマークの合唱団は歌を歌い敬意を表してくれた。このように音楽の交流は歌い合い、笑い合い、語り合うのであった。

さて、その交流会では、日頃たいへん興味のある事柄を聞いてみた。それは、デンマークの子供たちの事である。音楽教育について、学校教育、家庭教育の点である。ヨーロッパの場合と同じように、学校教育ではあまり期待できないのである。Brahetrolleborg 合唱団団員の子供の中にコペンハーゲン少年合唱団の一員だった子の親がいたので、社会教育ではどのようなことがいえるか聞いてみたのである。9年間の小中学校の中で、2年間音楽の授業があるそうです。それも、学校により異なり1年間のところもあるそうなのである。多くて2年間だということである。その後音楽をしたいのであれば、学外の余暇の活動センター学校などで音楽を習うことになるのである。ここは国か地方自治体からの補助が出ているとのことである。例えば1週間1時間のレッスンでD. kr 225、日本円で約3,400円ということである。月4回の授業を受けることができると言っていた。「すごく安く約3,400円」と言っていたので、安いという感覚らしい。実は日本では30分から40分で4回で平均8,000円位なので、デンマークでの4回のレッスン料が13,600円となるので、デンマークの方が公立であるが、日本に比べ高いといえる。さらにハンブルクの筆者の友人は1回4,000円いただいているとのことである。一ヶ月16,000円ということである。また、ギターでは1週間1時間でD.kr200、3,000円位ということである。音楽小学校・中学校・高校は上記のように課外余暇時間の学校となり、ほとんどが午後の学校となり、呼び方は音楽小学校と言われている。例外にコペンハーゲン少年合唱団、コペンハーゲン少女合唱団は小学3年に試験を受けて入る Skt. Anneskole (公立 Folkskole) がある。学校が合唱団の運営もしているのである。合唱学校のようなものである。合唱団としての予定はすべて出演が義務つけられている。ウイーン少年合唱団は変声期を迎えると学校を移らないとならないが、この合唱団学校は9年生まで在籍することができる。学費は無料。Folkshole (小中学校では) 楽器はほとんどなく、見たこともない子のために、課外授業にコンサート鑑賞をおいている学校もあるとのことである。音楽は学校においては日本はヨーロッパ諸国と比べてもたいへん進んでいる現状にある。ヨーロッパの伝統文化でもあり、学校で教わらなくても身につ

いている子供たちが多いのも確かです。デンマークで演奏家を目指す生徒は、次のコースをたどるのである。

- 1 段階目、小中学校（9年間）同時期に教育センタースクールに通う
- 2 段階目、高校（3年間）
- 3 段階目、音楽コンサバトリー（音楽大学）に進む

あとがき

デンマークでの交流演奏会を体験した中で、音楽を生活の中に自然に取り込める環境にあると感じた。それは教会の役割が大きく、家庭においても教会の音楽という位置付けで練習にも出かけやすいのではないかなと思う。また、職業と趣味そして家族、この3つの生活時間割が設定できており、上手に男女が助け合って時間を過ごすことを社会が認めているといえる。

北欧3国では25パーセントが消費税ということであるが、貯金を気にせず、現金を使える環境にある。これは大きな心のゆとりにつながっている。それは、その税金が国民の目、耳、口に触れるところで使われているため、自分の老後の設計も可能である。日本では老後の姿ははっきり個々で見えているのであろうか。精神的に心ゆくまで時間を過ごせる趣味の時間を持っている人たちと一緒に歌い、語り、笑い合ってきた。そこには人として感性を育み、理性との融合により自己を見つめる国民性がうかがえたのである。この演奏会で、演奏された曲、演奏した場所、日本の歌、町の様子、練習風景、練習法など、今回の交流は多くをもたらした。国代表、何々代表となると、ここまで見ることはできないのではないだろうか。

参考文献

- Goethe Heidenroslein ゲーテ「野ばら」考、坂西八朗編、岩崎美術社
独唱名曲100曲線、音楽之友社編、音楽之友社
北欧一白夜の国に魅せられて ヨーロッパカルチャーガイド 株式会社ラベルジャーナル
唱歌のふるさと、鮎川哲也著、音楽之友社
Faaborg, Faaborg 観光協会
FYN2001, FYN観光案内資料
デンマークを探る、小池直人著、風媒社
北欧音楽入門、大東省三、音楽之友社